

4. 隔離床養液土耕によるトマト夏秋栽培の後期増収効果（技術）			
[要約]			
トマト夏秋栽培において、<u>隔離床養液土耕</u>は慣行土耕に比べて、後期の草勢が維持され、花数及び着果率が向上するために<u>増収</u>する。			
研究室名	野菜・花研究室	連絡先	0869-55-0277

[背景・ねらい]

本県の夏秋トマト栽培では、9月以降の収量低下が問題である。そこで、草勢調節が容易な隔離床養液土耕栽培を産地で実施して、後期収量増加効果を検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 隔離床養液土耕は、慣行土耕に比べて1段果房および5段果房直下の茎径は同等又はやや細かったが、10段果房直下はやや太かった。また、果房数は多く、果房間長はやや短かった（表1）。
2. 隔離床養液土耕は慣行土耕に比べて、良果1果重は重く、可販果率は同等であったが、秀品率はやや低かった（表2）。良果収量は多く、月別では特に10月に多かった（図1）。なお、9月の収量は慣行土耕と同等であったが、これは隔離床養液土耕では8月上旬にフィルターの目詰まりで、給液不足による萎れが発生したことによると考えられる。
3. 花数及び着果率

隔離床養液土耕の後期の花数及び着果率は、慣行土耕及び近隣の他のハウスに比べて勝った（表3、図2）。

以上の結果から、隔離床養液土耕は慣行土耕に比べて、後期の草勢が維持され、花数及び着果率が向上するために増収すると考えられる。

[成果の活用面・留意点]

1. 給液チューブは、根の侵入による詰まり防止のために、株元から離して設置し、上部をマルチフィルムで覆わない。
2. 本試験は着果処理にマルハナバチを利用した。後半増加する花の着果率を向上させるためには、マルハナバチの利用が有効である。

[具体的データ]

表1 生育

区名	茎径			果房間長	果房数
	1段果房直下	5段果房直下	10段果房直下		
	mm	mm	mm	cm	
隔離床養液土耕	13.4	14.9	13.6	22.2	13.2
慣行土耕	13.0	16.0	11.7	24.6	11.3

表2 収量及び品質

区名	良果収量	良果1果重	可販果率	秀品率
	t/10a	g	%	%
隔離床養液土耕	13.4	168	87.9	27.7
慣行土耕	10.1	165	87.0	32.3

表3 花数及び着果

区名	結実助勢	花数	着果率
		花/花房	%/花房
隔離床養液土耕	マルハナバチ	5.7	72.3
慣行土耕	マルハナバチ	4.9	68.5
養液土耕（参考、近隣ハウス）	トマトトーン	5.0	66.3
慣行土耕（参考、近隣ハウス）	トマトトーン	5.1	56.3

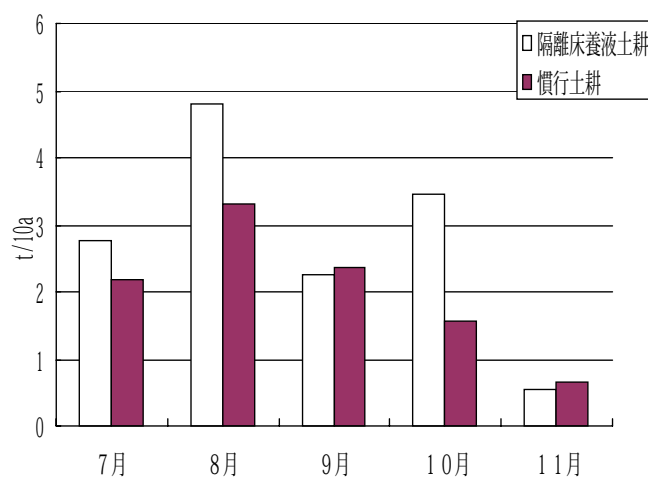


図1 月別良果収量

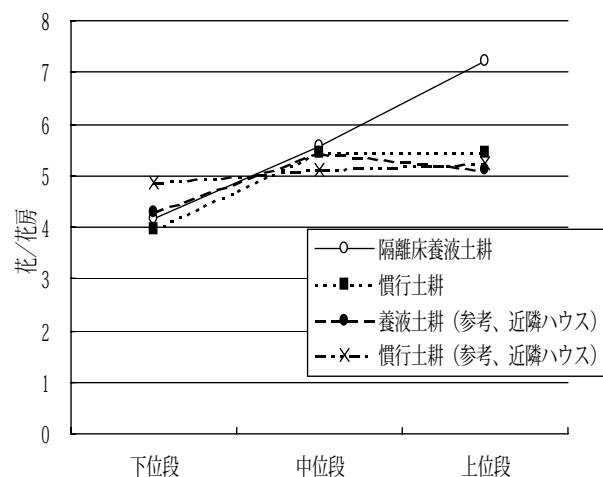


図2 花数の推移

[その他]

試験研究課題・課題：中山間地域における野菜等の少量多品目生産技術

予算区分：国庫助成（地域基幹）

研究期間：平成9～13年度

関連情報等：なし

[具体的データ]

表1 生育

区名	茎径			果房間長	果房数
	1段果房直下	5段果房直下	10段果房直下		
	mm	mm	mm	cm	
隔離床養液土耕	13.4	14.9	13.6	22.2	13.2
慣行土耕	13.0	16.0	11.7	24.6	11.3

表2 収量及び品質

区名	良果収量	良果1果重	可販果率	秀品率
	t/10a	g	%	%
隔離床養液土耕	13.4	168	87.9	27.7
慣行土耕	10.1	165	87.0	32.3

表3 花数及び着果

区名	結実助勢	花数	着果率
		花/花房	%/花房
隔離床養液土耕	マルハナバチ	5.7	72.3
慣行土耕	マルハナバチ	4.9	68.5
養液土耕（参考、近隣ハウス）	トマトトーン	5.0	66.3
慣行土耕（参考、近隣ハウス）	トマトトーン	5.1	56.3

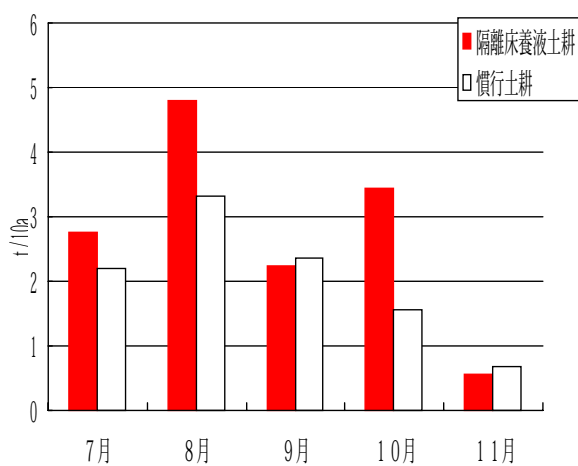


図1 月別良果収量

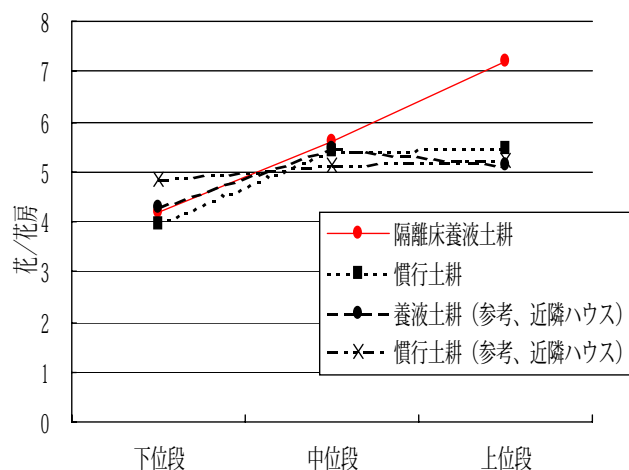


図2 花数の推移

[その他]

試験研究課題・課題：中山間地域における野菜等の少量多品目生産技術

予算区分：国庫助成（地域基幹）

研究期間：平成9～13年度

関連情報等：なし